



Title	居住者の環境評価に基づく自然環境共存型の住宅地像に関する研究
Author(s)	澤木, 昌典
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.11501/3155632">https://doi.org/10.11501/3155632</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	澤 木 昌 典
博士の専攻分野の名称	博 士 (工 学)
学 位 記 番 号	第 1 4 2 8 1 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 11 年 2 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 名	住 居 者 の 環 境 評 価 に 基 づ く 自 然 環 境 共 存 型 の 住 宅 地 像 に 関 する 研 究
論 文 審 査 委 員	(主 査) 教 授 鳴 海 邦 碩 (副 査) 教 授 盛 岡 通 教 授 桑 野 園 子 助 教 授 加 藤 晃 規

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、環境共生を基本とした住宅地の環境形成手法の定立に資することを目的に、大阪大都市圏の縁辺部における既存の郊外住宅地を事例として、それらの居住者の居住環境に対する評価やニーズを明らかにすることを通じて、周囲の自然環境と共存した形態の住宅地形成とその住環境整備の方向性とそれを実現する手法について論じたもので、内容は序章と本編6章および終章からなる。

序章においては、研究の背景と目的・意義ならびに論文の構成について述べている。

第1章では、文献研究により、阪神地域における戦前・戦後の郊外住宅地開発を概観し、初期の郊外居住者の自然志向や開発における自然環境の位置づけ、ならびに戦後の都市化の進展による緑地の喪失について分析し、自然環境が開発時の借景であり土地利用上その存続が保障されたものでなかったことを論じている。

第2章では、現行の法制度や開発手法の下での自然環境の保全・創出のための種々の手法について、文献資料を用いて整理し、その限界と可能性について考察している。

続く第3章から第6章では、JR福知山線沿線等の12の住宅地を対象とした住民意識調査に基づき、居住者の環境評価や自然環境共存型の住宅地像に関する分析を行っている。

第3章では、三田市におけるニュータウン居住者の自然志向ならびに「緑」に対する意識を分析し、近年の郊外居住における自然重視の傾向と一部の居住者に見られる積極的な自然生活志向を確認している。

第4章では、宝塚市等における山林隣接型住宅地居住者の自然志向ならびに「緑」に対する意識を分析し、自然環境の重視度の高さや宅地内樹林の保有状況および周辺樹林に対する保全意識などについて考察している。

第5章では、三田市におけるニュータウン居住者を中心に、生物に対する嗜好および生物との共存に関する意識の分析を行い、生物を忌避する居住者の存在や忌避される生物の傾向ならびに居住者がもつ公園緑地に対する生物の生息場所としての期待などを把握し、住宅地での生物との共存方向に関する考察を行っている。

第6章では、宝塚市等における市街地縁辺部住宅地居住者や三田市におけるニュータウン居住者について、自然環境との共存を目指した生活様式に関して、その実践状況と今後の意向を把握するとともに、自然環境共存型住宅地に

において展開が想定される生活様式と庭などの外部空間の期待される空間構成に関する考察を行っている。

終章では、以上の考察で得られた知見を取りまとめるとともに、自然環境共存型住宅地の形成や居住環境整備の方向性について論じ、さらに望ましい自然環境共存型住宅地の形成のための計画手法・誘導方策について提案している。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、環境保全型の環境形成が重要視されつつある状況下において、緊急にその確立が期待されている環境共生型の住宅地計画の基礎を得ることを目指し、大阪大都市圏の縁辺部における既存の郊外住宅地居住者の環境評価に関する意識の分析を通じて、居住者の要求する住環境と自然環境との整合のとれた住宅地形成のための知見をまとめたものである。得られた結果を要約すると以下の通りである。

- (1)ニュータウンおよび山林隣接型の住宅地居住者の自然や「緑」に関する意識の分析を通じて、自然地域に近接して居住するこれらの居住者が自然環境を重視して居住地選択を行っており、自然環境共存型の住宅地に対するニーズが存在すること、その一方で多くの居住者にとっての「緑」は自ら管理等に関与するものではなく眺める対象となっていることを明らかにしている。
- (2)さらに、これら住宅地の一部の居住者は、すでに日常の生活環境の中で積極的に自然と触れ合う生活態度を示していることや、宅地内に周辺と類似の樹林を有し、宅地内外の樹林の保全に強い関心を有するなどの傾向があることを明らかにしている。
- (3)同じく居住者意識の分析を通じて、自然環境共存型の居住環境において課題となる生物との共存について、その賛否には居住者の生物に対する好悪が大きく影響することを確認するとともに、自然度の異なる環境整備をゾーニングによって行うことの必要性や公園緑地内に樹林を保全することの重要性を明示している。
- (4)また、自然環境共存型住宅地で展開が想定される生活様式に関する居住者意識の分析を通じて、周囲の豊かな自然環境の存在が自然環境重視型の生活様式を実践しやすくすること、さらにそうした生活様式の展開を支援する場として自然度の高い環境構成をもった庭や周辺農地等の存在が重要であることを明示している。
- (5)自然地域に近接して居住する居住者の自然環境に関する意識および生活様式の分析から得られた知見に基づいて、自然環境共存型住宅地の形成の可能性とその環境像について考察するとともに、自然環境共存型住宅地形成の方法として、新規住宅地開発において計画者が配慮すべき事項としての自然環境保全方針、土地利用計画ならびに宅地計画作成に際しての留意事項、さらに既存の住宅地を自然環境共存型に導く方策、およびこれらの住宅地における居住者の自然環境保全意識醸成の必要性について提言している。

以上のように、本論文は、自然環境保全を重視した良好な住宅地環境の形成という観点に立って、従来の住宅地開発では認識されることの少なかった生物との共存や「緑」の管理等に関する居住者の意識に着目し、居住者の要求を満足する住環境整備のための基礎的な課題を提示するとともに、課題解決および目標とする住環境形成のための提案を行っており、環境工学の発展に寄与する所大である。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。